

# 薄景に住まう

## —市街化調整区域に残された集落の未来の再考—

かつての日本の農村集落では、暮らしを**自然の循環**に組み込み、**相互扶助の精神**を基盤とした**独自の文化**を根付かせて生活が営まれていた。この暮らしの空間こそ集落における**歴史的空間**ではないか。しかし、多くの農村集落では、高度経済成長期に**市街化調整区域**に指定され、無秩序な開発から守られた一方、発展の機会が奪われ**縮小**が余儀なくされてきた。こうした集落において必要なのは、発展ではなく残された住民の暮らしを**“いかに持続可能なものにするか”**であると考えます。

本提案では、縮小が進む滋賀県仰木地区において、古くから根づく相互扶助の共同体である『**講**』に着目する。縮小によって生まれる空き家や集落全体の結びの修繕・再利用に至るプロセスを『**講システム**』として再解釈し、縮小によって生まれる問題に対する解決手法を**住民が担い手となる相互扶助的・持続可能な暮らしへの再編手法**として提案する。



### 01 社会背景

#### ■01-a 市街化調整区域による開発の抑制



高度経済成長期の線引きで多くの農村集落が市街化調整区域に指定され開発が抑制された。しかし現在は、集落を守るはずだった仕組みが足枷となり、**人口減少や文化・想いの喪失**が懸念されている。

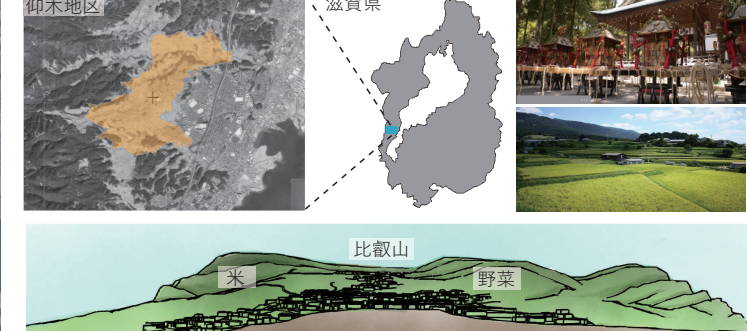
#### ■01-b 調整区域の暮らしの変貌



調整区域では、人口流出により空き家の増加、建物の老朽化が進み、解体されず放置されている。利用される建物も手入れが行き届かず、**今後環境への影響や地域の景観・安全性の悪化**が計り知れない。

### 02 計画敷地 滋賀県 大津市 仰木地区

#### ■02-a 豊かな自然が残る仰木地区



比叡山麓の仰木地区は棚田や農村文化が息づく里山の風景が残る。比叡山の湧水で育つ農作物は都市部の食を支えてきたが、担い手減少により**生産維持が難しく役割を果たせなくなりつつある**。

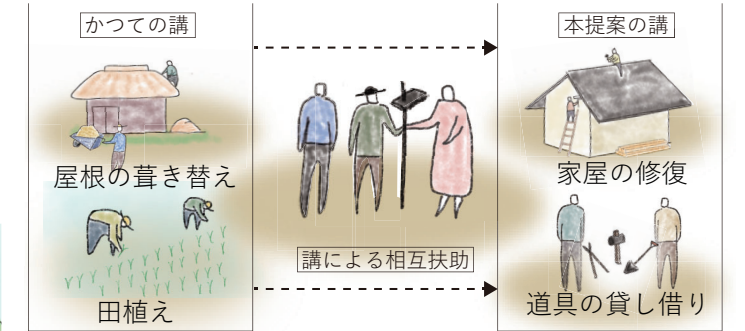
#### ■02-b 「講」の根づく暮らし



仰木には民間信仰から生まれた集団「**講**」があり、農作業や屋根の葺き替えなどを協力して行ってきた。**文化は今も残っており**、仰木祭りや「御所山の火焚き」などの行事が継承されている。

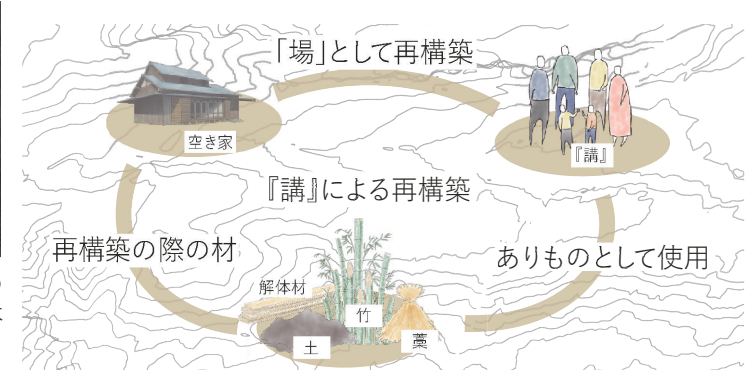
### 03 提案概要：講の再考と新たな役割

#### ■03-a 「講システム」の構築



歴史的空間とは農村集落の**相互扶助と自然共生を基盤に文化が根付いた暮らしの空間**にある。仰木地区の廃屋や耕作放棄地など縮小で生じる縫ひを編み直す手法として『**講システム**』を提案する。

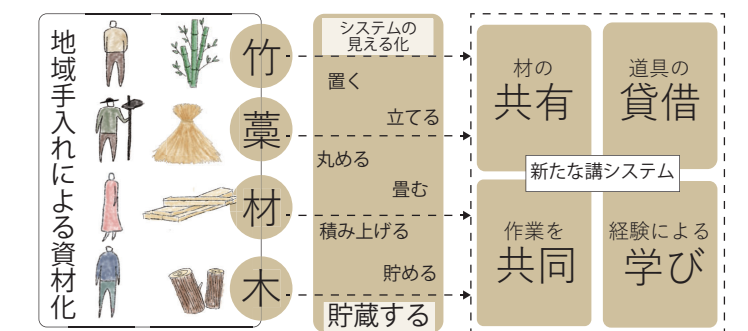
#### ■03-b 「講」の再編による相互扶助と地域内循環の構築



本提案は**空き家を講の結節点として再構築**する。暮らしの作法や文化が残る家屋を有用な資源と捉え維持・修繕し、ヒトや資源の貸借を通じ**新たな相互扶助と地域内循環**を育む関係を築く。

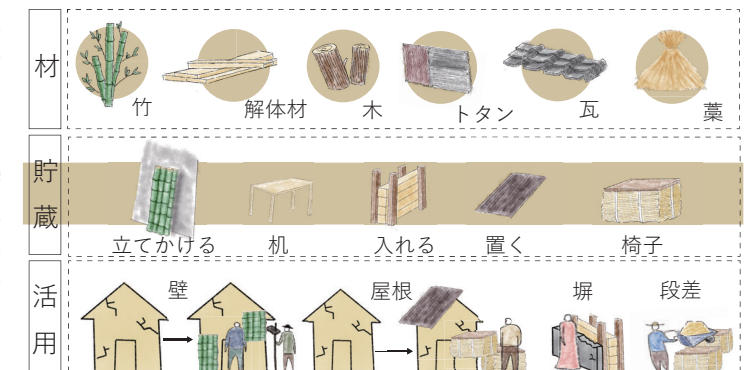
### 04 提案：相互扶助による暮らしの再構築

#### ■04-a 「講システム」による地域の整えかた



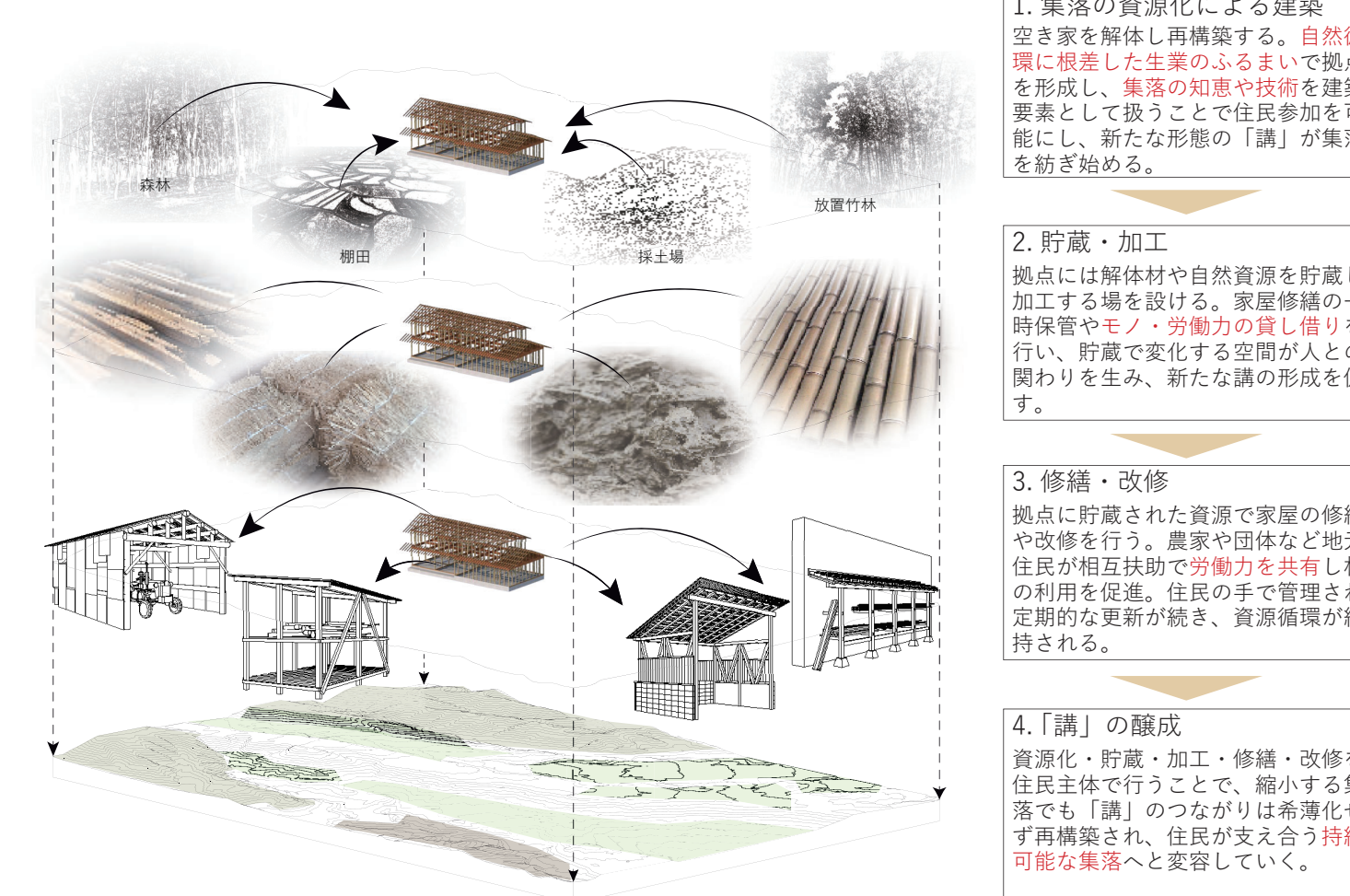
新築が困難な調整区域では、**既存家屋や地域の材料を資源として貯蔵**し新たな講が生まれる。講のつながりが建物や自然を整え、縮小する中でも暮らしを豊かにし**持続可能な集落を形成**する。

#### ■04-b 資源の貯蔵と循環

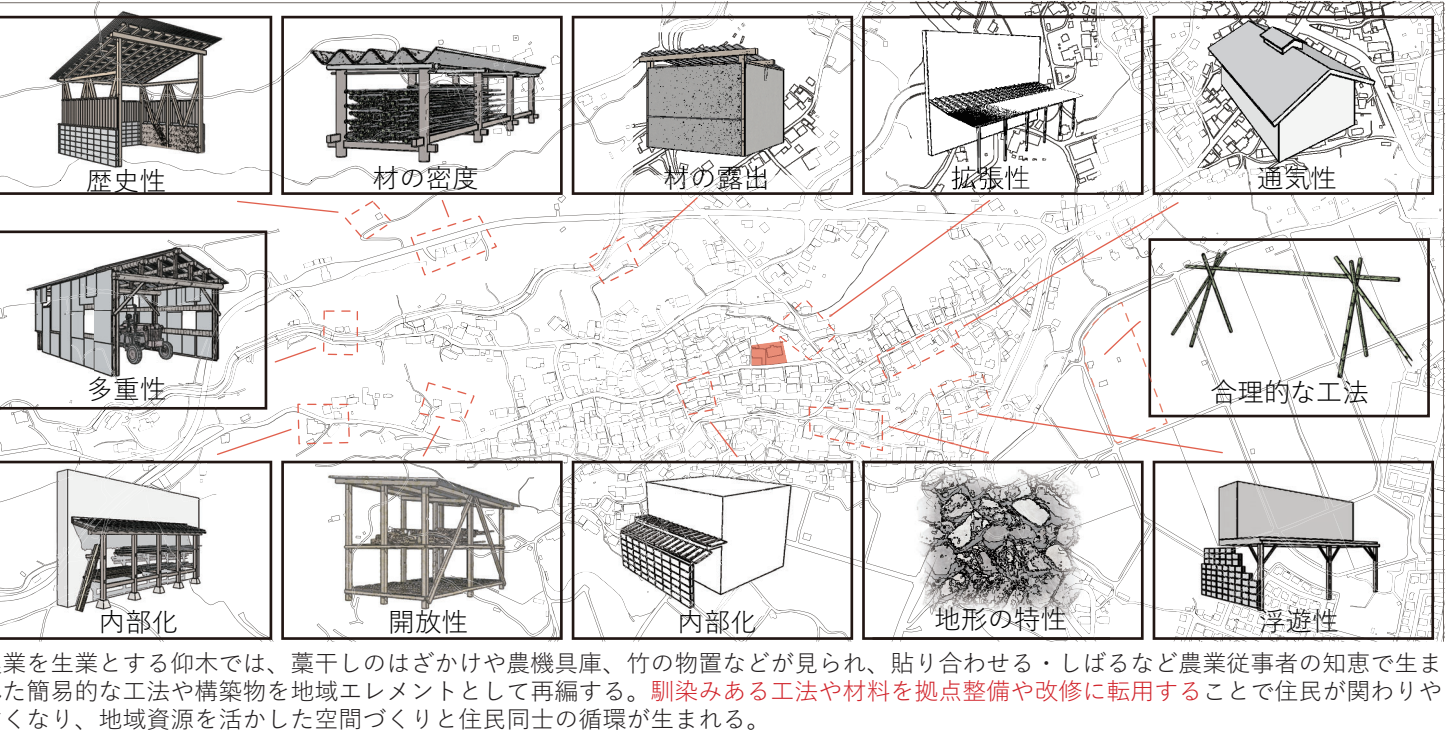


講システムにより解体材や自然材料を**拠点に貯蔵し内装・外装・什器に活用**する。必要に応じ加工し補修へ循環させ、貯蔵・加工・活用を繰り返すことで地域の**資源が再び暮らしへ還っていく**。

### 05 「講」の醸成

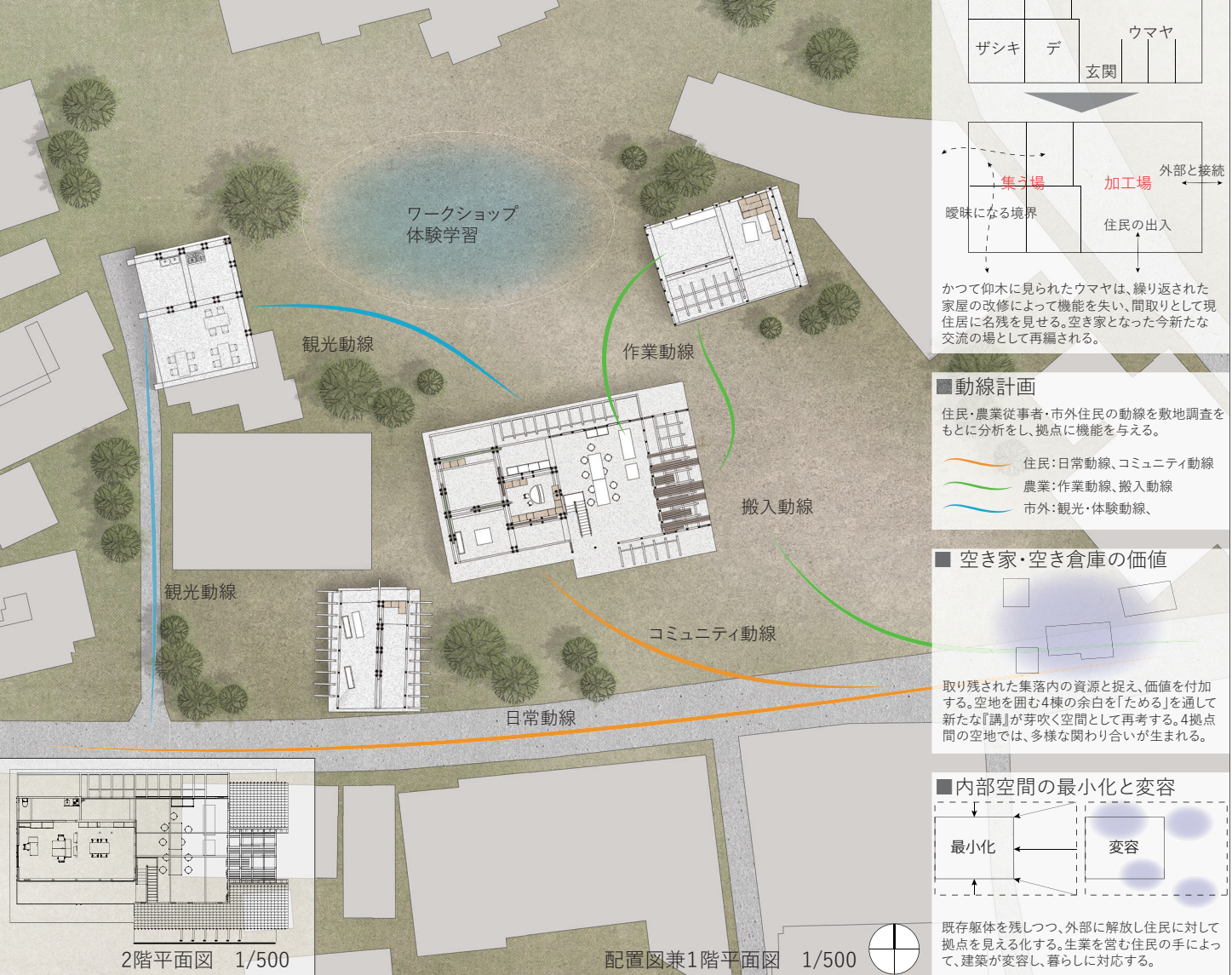


### 06 地域要素の建築への転用

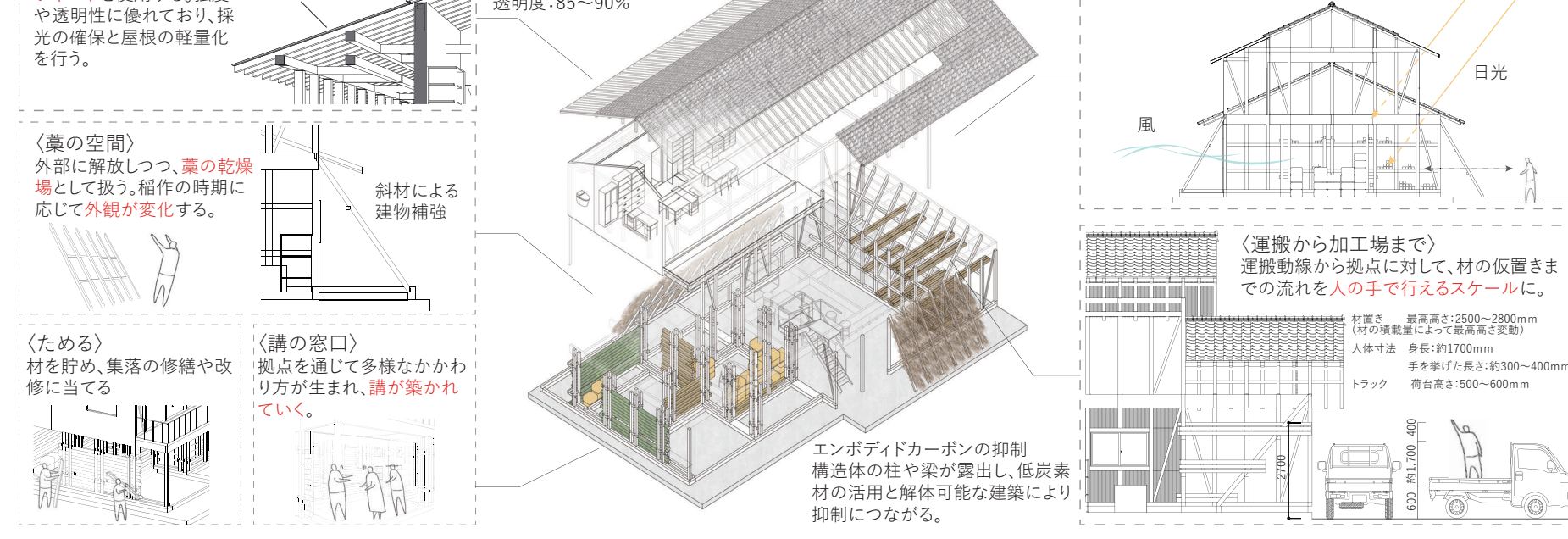


農業を生業とする仰木では、兼干しのはざかけや農機具庫、竹の物置などが見られ、貼り合わせる。しぼるなど農業従事者の知恵で生まれた簡易的な工法や構築物を地域要素として再編する。**創案みある工法や材料を拠点整備や改修に転用**することで住民が関わりやすくなり、地域資源を活かした空間づくりと住民同士の循環が生まれる。

### 09 配置・平面計画



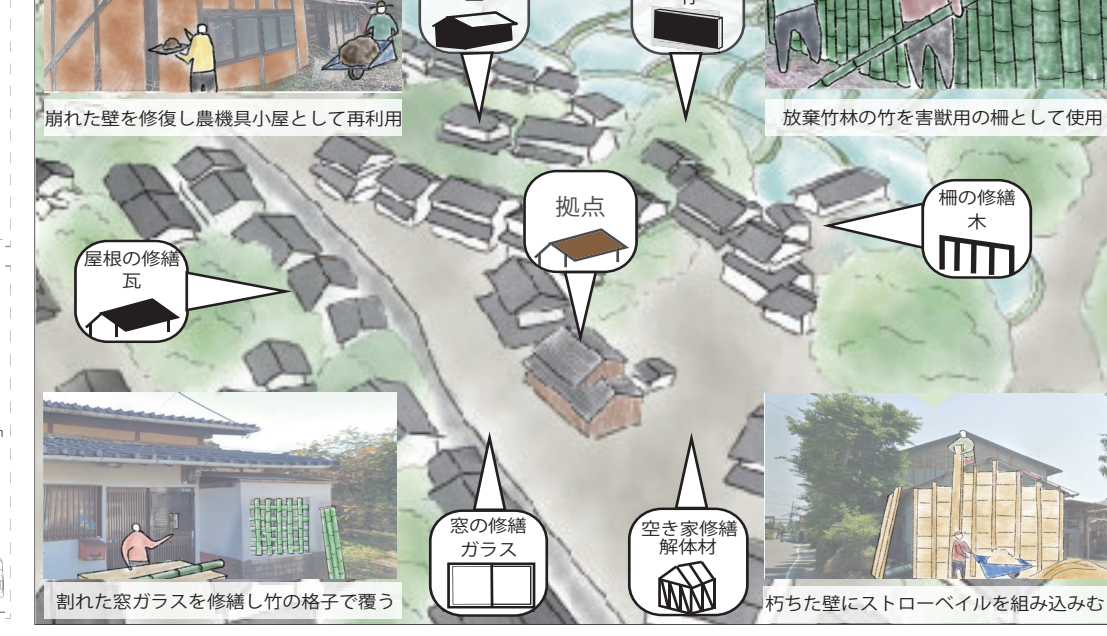
### 10 設計：講の拠点 地域材・貯蔵



### 11 断面図



### 12 集落への広がり



### 13 講システムによる変化

